

# 病害虫発生予察情報（9月予報）

平成28年8月31日

静岡県病害虫防除所長

## 1 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (9月の県平均平年値)	予報の根拠
イネ	いもち病 (穂いもち)	発生量：少 (発病株率 0.5%)	8月上～下旬の葉いもち発生量：少(発生なし) (-) 8月上～下旬の穂いもち発生量：少(発生なし) (-) 気象予報：気温：高い(-) 降水量：多い(+)
	紋枯病	発生量：やや多 (発病株率 7.4%)	8月上～下旬発生量：並(±) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：多い(+)
	ごま葉枯病	発生量：多 (発病株率 15.1%)	8月上～下旬発生量：多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：多い(+)
	トビイロウンカ	発生量：並 (寄生数 0.23 頭/株)	8月上～下旬発生量：少(発生なし) (-) 8月の成虫誘殺数：少(誘殺なし) (-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：多い(-)
	斑点米カメムシ類	発生量：やや少	8月上～下旬発生量：少(-) 8月の成虫誘殺数：並(±) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：多い(-)
ダイズ	べと病	発生量：やや少 (発病株率 13.0%)	8月下旬発生量：少(-) 気象予報：気温：高い(-) 降水量：多い(+)
	さび病	発生量：少 (発病株率 0.0%)	8月下旬発生量：少(発生なし) (-) 気象予報：気温：高い(-) 降水量：多い(-)
	ハスモンヨトウ	発生量：多 (寄生株率 14.3%)	8月下旬発生量：多(+) 8月の成虫誘殺数：並～多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：多い(-)
チャ	炭疽病	発生量：やや少 (病葉数 26.5 葉/1.25m <sup>2</sup> )	8月中下旬発生量：少(-) 気象予報：気温：高い(-) 降水量：多い(+)
	チャノキイロ アザミウマ	発生量：少 (叩き落とし虫数 8.6 頭/4カ所)	8月中下旬発生量：少(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：多い(-)
	チャノミドリヒメ ヨコバイ	発生量：並 (叩き落とし虫数 1.0 頭/4カ所)	8月中下旬発生量：並(±) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：多い(-)

病害虫発生予察情報

作物名	病害虫名	予報 (9月の県平均平年値)	予報の根拠
チャ	チャノホソガ	発生量：やや少 (巻葉数 3.7 葉/1.25 m <sup>2</sup> )	8月中下旬発生量：少 (－) 8月の成虫誘殺数：並～多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：多い (－)
	ヨモギエダシヤク	発生量：少 (叩き落とし虫数 0.1 頭/4 カ所)	8月中下旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：多い (±)
	カンザワハダニ	発生量：並 (寄生葉率 2.3%)	8月中下旬発生量：多 (＋) 気象予報：気温：高い (－) 降水量：多い (－)
	クワシロ カイガラムシ	発生量：少 (寄生株率 2.3%) 発生時期：早	8月中下旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：多い (－)
ウンシュウミカン	黒点病	発生量：並 (発病度 1.0)	8月中下旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：多い (＋)
	ミカンハダニ	発生量：やや少 (寄生葉率 6.1%)	8月中下旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：多い (－)
	チャノキイロ アザミウマ	発生量：少 (寄生果率 0.1%)	8月中下旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：多い (－)
中晩柑類	かいよう病	発生量：並 (果実発病度0.6)	8月下旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：多い (＋)
カキ	ハマキムシ類	発生量：やや少	8月中旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：多い (±)
果樹全般	カメムシ類	発生量：少	スギ・ヒノキ毬果量：少 (－) 8月上中旬誘殺数：少 (－) ヒノキ毬果吸汁痕数：やや少 (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：多い (±)
ネギ	疫病	発生量：やや少 (発病株率4.9%)	8月下旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：多い (＋)
	黒斑病・葉枯病	発生量：やや少 (発病株率2.9%)	8月下旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：多い (＋)
	シロイチモジヨトウ	発生量：少 (発病株率4.3%)	8月下旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：多い (－)
	ネギハモグリバエ	発生量：多 (発病株率 37.2%)	8月下旬発生量：多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：多い (－)
	ネギアザミウマ	発生量：多 (発病株率 41.8%)	8月下旬発生量：多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：多い (－)

病害虫発生予察情報

作物名	病害虫名	予報 (9月の県平均平年値)	予報の根拠
イチゴ	炭疽病	発生量：多 (10月発病株率 0.9%)	8月上中旬発生量：並 (±) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：多い (+)
	うどんこ病	発生量：並 (10月発病株率 1.8%)	8月上中旬発生量：並 (±) 気象予報：気温：高い (-) 降水量：多い (±)
	ハダニ類	発生量：やや多 但し、中部は多 (10月寄生株率 10.5%)	8月上中旬発生量：並(±) 但し、中部は多 気象予報：気温：高い(+)
	ハスモンヨトウ	発生量：やや少 (10月寄生株率 1.2%)	8月上中旬発生量：少(-)(発生なし) 8月フェロモントラップ捕獲数：並～多い(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：多い(±)
キク (露地)	白さび病	発生量：少 (発病株率 0.1%)	8月下旬発生量：少(発生なし) (-) 気象予報：気温：高い(-) 降水量：多い(+)
	黒斑・褐斑病	発生量：並 (発病株率 8.5%)	8月下旬発生量：少(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：多い(+)
	えそ病 (トマト黄化えそウ イルス：TSWV)	発生量：やや少 (発病株率 0.8%)	8月下旬発生量： えそ病：少(発生なし) (-) アザミウマ類：多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：多い(-)
	アザミウマ類	発生量：多 (被害株率 8.8%)	8月下旬被害量：多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：多い(-)
	ハダニ類	発生量：少 (寄生数 1.0頭/10葉)	8月下旬発生量：少(発生なし) (-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：多い(-)
	アブラムシ類	発生量：少 (寄生株率 1.2%)	8月下旬発生量：少(発生なし) (-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：多い(-)
	オオタバコガ	発生量：やや少 (被害株率 10.8%)	8月下旬被害量：少(-) 8月の成虫誘殺数：並(±) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：多い(-)

表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年(静岡県)の過去10年間との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階で示しています。
- ・ 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年(静岡県)の過去10年間との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況(調査時期と発生量)、気象庁の1ヶ月予報(気温と降水量)を記入しています。その状況が多発要因の場合は(+)、少発要因の場合は(-)を示し、+-を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

## 2 予報の根拠と防除対策

### 【イネ】

#### <生育の概況等>

巡回時の生育調査（下表、調査期間：8月4日～23日）では、草丈、稈長、穂長、茎数および葉色は平年並であった。病虫害防除員からのアンケート調査によれば、生育は平年並～早い傾向にある。

8月上～下旬の調査地点におけるイネの生育状況

	田方 平坦地	東部 高冷地	志太榛原	中遠・西部 (普通期)	中遠 (早期)	県平均
草丈 (cm)	92.3 (91.2)	— —	87.5 (91.2)	83.1 (89.5)	103.0 —	90.4 (90.5)
稈長 (cm)	— (76.7)	79.1 (79.8)	76.0 (75.6)	75.7 (79.6)	85.8 (82.0)	79.6 (79.6)
穂長 (cm)	— (17.8)	17.6 (18.5)	16.1 (18.5)	16.9 (18.7)	17.6 (18.8)	17.1 (18.6)
茎数 (本)	22.2 (22.9)	17.8 (21.0)	19.6 (20.9)	22.9 (21.9)	24.3 (21.9)	21.2 (21.7)
葉色 (指数1-7)	4.1 (4.1)	4.1 (4.0)	3.8 (4.2)	4.2 (4.2)	3.9 (3.1)	4.0 (3.9)

( )内は平年値

※穂揃い期前のほ場は草丈、穂揃い期以降のほ場については稈長・穂長を計測した。

### ●いもち病（穂いもち）

#### 予報の根拠

- ・8月上～下旬の巡回調査では、穂いもちの発病は認められなかった（平年発病株率1.3%）。また、穂いもちの発病も認められなかった（平年発病株率0.6%）。
- ・1か月予報では、9月の降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本病の発生を特には助長しない（感染好適条件：気温15℃～25℃、葉面湿潤時間10時間以上、前5日間の平均気温が20℃～25℃を全て満たす時）。

#### 防除対策

- ・育苗箱処理剤の残効は出穂期頃までなので、効果の切れた時期以降で、本病の発生に適した曇雨天で日照不足が続く場合は注意が必要である。
- ・上位1～3葉に病斑が見られる場合は、適期（穂ばらみ期～穂ぞろい期）に必ず防除を実施する。特に、急性型病斑（病斑周辺部に褐色部分が少なく、病斑が暗緑色あるいはねずみ色）が多いときには、速やかに薬剤散布をする。
- ・常発地では薬剤の予防散布を行う。
- ・本年はいもち病の発生が少ないが、本県では過去にMBI-D剤（「ウィン」、「デラウス」または「アチーブ」

## 病害虫発生予察情報

を含む剤) 耐性もち病菌が確認されている。また、近年、他県ではQoI 剤(「アミスター」または「嵐」を含む剤) 耐性もち病菌が発生し問題となっており、本県でも発生が懸念されるため、耐性菌の発生リスクが高い薬剤を使用する場合は、連用を避けるなど適切に使用する(詳細は県病害虫防除基準の「殺菌剤耐性菌に関する各種資料について」の項を参照)。

8月上～下旬の調査地点における葉いもちの発生状況

	田方 平坦地	東部 高冷地	志太榛原	中遠・西部 (普通期)	中遠 (早期)	県平均
発病株率 (%)	0.0 (0.2)	0.0 (0.2)	0.0 (1.3)	0.0 (3.0)	0.0 (1.7)	0.0 (1.3)

( )内は平年値

8月上～下旬の調査地点における穂いもちの発生状況

	田方 平坦地	東部 高冷地	志太榛原	中遠・西部 (普通期)	中遠 (早期)	県平均
発病株率 (%)	0.0 (0.02)	0.0 (0.1)	0.0 (0.4)	0.0 (0.4)	0.0 (1.8)	0.0 (0.6)

( )内は平年値

### ●紋枯病

#### 予報の根拠

- ・8月上～下旬の巡回調査では、県平均発病株率は7.5% (平年6.3%) と平年並の発生であった。
- ・1か月予報では、9月の気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、本病の発生を助長する(本病は生育適温30～32℃と高温を好む)。

#### 防除対策

- ・水田等で越冬した菌核が一次伝染源となるため、前年発生がみられたほ場では発生しやすい。そのようなほ場では発生に注意し、発生が見られた場合はすみやかに薬剤防除を行う。
- ・病斑が上位葉鞘まで上がると減収の要因になる。特に過繁茂となっているほ場では多発しやすいため、そのようなほ場では今後の発生に注意する。

### ●ごま葉枯病

#### 予報の根拠

- ・8月上～下旬の巡回調査では、県平均発病株率は14.2% (平年10.1%) と平年より多かった。
- ・出穂期以降登熟期までの高温は、イネの老化と病原菌の活動を促すため、本病の発生が多くなる(病原菌の生育適温:25～30℃)。1か月予報では、9月の気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、本病の発生を助長する。

#### 防除対策

- ・肥料切れにより発生が助長されるため、穂肥を適切に施用する。
- ・出穂期以降に高温・多湿が続いた場合には、葉の斑点のみならず穂枯れを起こすので、葉に病斑が見られる場合は穂ばらみ期～穂ぞろい期にかけて薬剤散布を行う。

## ●トビイロウンカ

### 予報の根拠

- ・ 8月上～下旬の巡回調査ではトビイロウンカは確認されなかった（平年0.04頭/株）。
- ・ 8月第4半旬時点の県内3ヶ所の予察灯では、本種の誘殺は確認されていない。
- ・ 1か月予報では、9月の降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、トビイロウンカの増殖を助長する。

### 防除対策

- ・ 9月の気温が高い場合には急増することがある。葉色に注意し、水田内で坪状に葉が黄化している場合は株元を観察し、成幼虫の寄生が確認された場合は直ちに薬剤防除を行う。

## ●斑点米カメムシ類（アカスジカスミカメ、ホソハリカメムシ、クモヘリカメムシ、ミナミアオカメムシ等）

### 予報の根拠

- ・ 8月上～下旬の水田におけるすくい取り調査では、22%の水田（平年31%）からアカスジカスミカメ、ホソハリカメムシ、クモヘリカメムシ等が捕獲され、平均捕獲数は0.5頭/30回振り（平年1.1頭）と平年より少なかった。
- ・ 8月第4半旬時点の県内3ヶ所の予察灯では、アカスジカスミカメとアカヒゲホソミドリカスミカメの誘殺数は平年並で推移している。
- ・ 1か月予報では、9月の降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、斑点米カメムシ類の増殖を助長する。

### 防除対策

- ・ 出穂後は水田内のカメムシ類の発生に注意し、確認された場合は薬剤防除を実施する。穂揃期とその7～10日後の2回薬剤散布を行うと効果が高い。
- ・ なお、農林水産省の蜜蜂被害事例調査により、「蜜蜂被害は、水稻のカメムシを防除する時期に多く、水稻のカメムシ防除に使用した殺虫剤（農薬）を直接浴びたことが原因である可能性が高い」ことが報告されたため、養蜂家との情報を図る等、蜜蜂への影響に留意し防除を行う。なお、詳細は農林水産省ホームページ（[http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n\\_mitubati/honeybee\\_survey.html](http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_mitubati/honeybee_survey.html)）を参照すること。

## 【ダイズ】

### <生育の概況等>

生育は平年よりやや早い。

## ●べと病

### 予報の根拠

- ・ 8月下旬の巡回調査では、県平均発病株率は1.4%（平年3.3%）と平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、9月の気温は平年より高いが、降水量は平年より多いため、本病の発生をやや助長する（本病は15～20℃程度の比較的冷涼で雨の多いときに発生する）。

### 防除対策

- ・ 発病がみられるほ場では薬剤防除を行うとともに、被害茎葉は感染源となるため速やかに摘み取り、土中に埋めるかビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。

## ●さび病

### 予報の根拠

- ・ 8月下旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発病株率 0.7%）。
- ・ 1か月予報では、9月の気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、本病の発生を特には助長しない（病原菌の植物体への侵入適温は 24℃程度）。

### 防除対策

- ・ 本病は初秋から晩秋にかけて発病し、いったん発生すると急速に拡大するので、下葉に発生が認められたら速やかに薬剤防除を実施する。
- ・ 本病の症状は葉焼病に似るが、葉裏に灰褐色の隆起した小斑点を生じ、触れると灰褐色の粉が手につくので区別できる。

## ●ハスモンヨトウ

### 予報の根拠

- ・ 8月下旬の巡回調査では、平均寄生株率は 10.6%（平年 4.0%）と平年より多かった。
- ・ フェロモントラップによる誘殺数は、平年並〜多く推移している。
- ・ 1か月予報では、9月の降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、ハスモンヨトウの増殖を助長する。

### 防除対策

- ・ 食害（特に白化した葉）に注意してほ場を観察し、若齢幼虫を見つけ次第、薬剤防除を行う。

## <その他の病虫害>

### ●カメムシ類

- ・ 8月下旬の巡回調査では、寄生は確認されなかった（平年寄生株率 0.3%）。
- ・ ダイズには主にホソヘリカメムシ、イチモンジカメムシが発生するが、近年、ミナミアオカメムシが増加傾向にある。ミナミアオカメムシの成虫は黄緑色で体長 12-16mm、幼虫は黒褐色または黄緑色の体色に白や赤色の斑点を有する。ほ場内を観察し、寄生を確認した場合は薬剤防除を実施する。

### ●ハダニ類

- ・ 8月下旬の巡回調査では、平均寄生株率は 32.8%（平年 0.4%）と平年より多かった。
- ・ 中～下位の葉裏を観察し、寄生が多い場合は薬剤防除を行う。

## 【チャ】

### <生育の概況等>

高温・少雨の影響により、生育抑制のみられる茶園がある。

### ●炭疽病

#### 予報の根拠

- ・ 8月中下旬の巡回調査では、新芽での平均発病葉数は 11.1 葉/1.25 m<sup>2</sup>（平年 22.9 葉/1.25 m<sup>2</sup>）で、平年より少なかった。但し、病葉数が 1 m<sup>2</sup>あたり 50 葉を超える茶園も一部で認められた。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いが、降水量は平年より多いため、本病をやや助長する。

### 防除対策

- ・本病の感染には、新芽生育期に降雨による孢子の飛散と10時間以上の葉の濡れが必要であり、本病の潜伏期間はおよそ20日と長い。秋芽生育初期に半日以上続く降雨があった場合には、早めに防除を行う。
- ・一方、生育中期以降の降雨により感染しても、秋冬番茶や秋の整枝作業で新芽の上部は刈り捨てられるので、防除の必要はない。

### ●チャノキイロアザミウマ

#### 予報の根拠

- ・8月中下旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は7.8頭/4カ所（平年19.6頭/4カ所）で平年より少なかった。
- ・1か月予報では、9月は気温が高いが、降水量は多いことから、発生を特に助長しない。

### 防除対策

- ・9月に秋冬番茶を摘採する茶園では、発生状況を確認し、秋芽の萌芽期～開葉初期に防除を行う。

### ●チャノミドリヒメヨコバイ

#### 予報の根拠

- ・8月中下旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は1.3頭/4カ所（平年1.6頭/4カ所）で平年並の発生であった。
- ・1か月予報では、9月は気温が高いが、降水量は多いことから、発生を特に助長しない。
- ・9月に秋冬番茶を摘採する茶園では、発生状況を確認し、秋芽の萌芽期～開葉初期に防除を行う。

### ●チャノホソガ

#### 予報の根拠

- ・8月中下旬の巡回調査では、平均巻葉数は0.8葉/1.25㎡（平年5.4葉/1.25㎡）で、平年に比べ少なかった。
- ・フェロモントラップによる誘殺数は、平年並～多く推移している。
- ・1か月予報では、9月は気温が高いが、降水量は多いことから、発生を特に助長しない。

### 防除対策

- ・新芽生育期と成虫発生期が合致すると発生が多くなる。
- ・地域の予察灯やフェロモントラップにおける誘殺虫数の推移や新芽への産卵状況に注意し、秋冬番茶を摘採する茶園では適期防除に努める。なお成虫の誘殺数データは防除所ホームページで提供している。

### ●ヨモギエダシャク

#### 予報の根拠

- ・8月中旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は0.06頭/4カ所（平年0.10頭/4カ所）で平年と同様に少なかった。
- ・1か月予報では、9月は気温が高いが、降水量は多いことから、発生を特に助長しない。

### 防除対策

- ・平年は8月後半に成虫が発生し、9月になると幼虫の発生が見られる。本種は、茶園内で局所的に発生するので、茶園内をよく観察し、薬剤感受性の高い若齢幼虫の時期に防除を行う。



## ●カンザワハダニ

### 予報の根拠

- ・ 8月中下旬の巡回調査では、茶株面の平均寄生葉率は7.9%（平年1.2%）で平年に比べ多かった。
- ・ 1か月予報では、9月は気温が高く、降水量は多いことから、天敵のカブリダニ類の増殖に適している。

### 防除対策

- ・ 9月に秋冬番茶を摘採する茶園では、天敵への影響が少ない薬剤を選択し、直ちに防除を行う。

## ●クワシロカイガラムシ

### 予報の根拠

- ・ 8月中下旬の巡回調査では、平均寄生株率は9.8%（平年19.2%）で平年に比べ少なかった。
- ・ 例年9月は発生程度・発生面積ともに減少する。
- ・ アメダスの気温データに基づく茶業研究センター（菊川市）の第3世代予想ふ化最盛日は、8月29日の計算によると平年より10日早い9月8日と予想される。

### 防除対策

- ・ 地域のふ化最盛予想時期に、茶園内のふ化状況をよく観察し、適期防除を行う。アメダス地点の予想ふ化最盛日については防除所ホームページで提供している。

## <その他の病害虫>

### ●褐色円星病

- ・ 一番茶摘採期に発生の多かった茶園では、秋芽の生育期～硬化期に1～2回防除する。

### ●赤焼病

- ・ つゆひかり等の感受性品種では、春先に発病して枯死した枝に病原細菌が残存して越冬している。この菌が秋以降、台風等により増殖し冬の発病につながるため、台風による風雨の影響を受けた場合は通過後に薬剤散布を実施し緊密度を下げしておく。

### ●チャトゲコナジラミ

- ・ 8月中下旬の巡回調査では、茶株裾面の平均寄生葉率は16.3%（平年4.3%：過去6年）で多かった。
  - ・ 1か月予報では、9月は気温が高いが、降水量は多いことから、発生を特に助長しない。
  - ・ 本種は県内の多くの茶園に発生が広がっており、8月中下旬に第3世代成虫が発生した。成虫の発生が多い茶園では、9月初旬からの若齢幼虫期に防除を行う。防除は幼虫の寄生が多い裾部の葉裏に薬剤が届くように散布する。防除前に裾刈を行うと薬剤が茶株内部まで届き、防除効果が高まる。
- なお、防除の際には、薬剤の使用時期（摘採前日数）に注意する。

### ●チャノホコリダニ

- ・ 8月中旬～9月にかけて乾燥が続くと、秋芽にチャノホコリダニが多発することがある。秋冬番茶を摘採する茶園では、発生に注意し、早めに防除する。

## 【ウンシュウミカン】

### <生育の概況等>

主要産地における生育は平年より5～7日程度早い。

## ●黒点病

### 予報の根拠

- ・ 8月の巡回調査では、平均発病率 0.3%、平均発病度 0.0 と平年より少ない発生だった（平年平均発病度 1.0）。
- ・ 1か月予報によると、気温は高く、降水量は多いため、本病の発生を助長する。

### 防除対策

- ・ 薬剤の散布間隔は前回の散布日から 25～30 日、または累積降雨量 250～300mm を目安にして防除を行う。
- ・ 早生品種の防除は収穫前日数に注意する。
- ・ アメダスの気象データを用いたシミュレーションによる要防除時期の予想は防除所ホームページを参照。

## ●ミカンハダニ

### 予報の根拠

- ・ 8月の巡回調査では、平均寄生葉率は 1.9%（平年 10.7%）で平年より少なかった。
- ・ 1か月予報によると、気温は高いが、降水量は多いと予想され、本種の発生を特に助長しない。

### 防除対策

- ・ 着色期以降に発生すると果実は着色不良となり、商品価値が低下するため、発生がみられた場合は薬剤防除を行う。

## ●チャノキイロアザミウマ

### 予報の根拠

- ・ 8月の巡回調査では、平均寄生葉率は 0.03%（平年 0.3%）で平年より少なかった。果梗部被害度は 2.0（平年 1.5）で平年より多かった。果頂部被害は 0.2（平年被害度 0.6）で、平年より被害は少なかった。
- ・ 1か月予報によると、気温は高いが、降水量は多いと予想され、本種の発生を特に助長しない。

### 防除対策

- ・ アメダスの気象データを用いて有効積算温度を計算したところ、第7世代成虫の発生ピークは9月上中旬と予想される（各産地における成虫発生時期の予想についてはホームページを参照）。
- ・ 薬剤防除適期は各世代の発生ピーク 7 日前～当日である。各地域の発生ピークを参考に防除を行う。
- ・ 普通温州園では、寄生果率 10%を目安に防除を行う。

## 【中晩柑】

## ●かいよう病

### 予報の根拠

- ・ 8月の巡回調査では、果実の平均発病度は 0.2（平年 0.4）、葉の発病度は 0.4（平年 0.8）と平年より少ない発生であった。
- ・ 1か月予報によると、気温は高く、降水量は多いため、本病の発生を助長する。

### 防除対策

- ・ 台風や長雨により感染が拡大する恐れがある。降雨後に散布しても、すでに感染した組織内の菌にはほとんど効果はないので、気象情報とほ場の発生状況に注意して降雨前の予防散布を行う。
- ・ 夏秋枝は罹病しやすく伝染源となるので切除する。

## 【カキ】

### ＜生育の概況等＞

主要産地における生育は3～5日程度早い。

### ●ハマキムシ類

#### 予報の根拠

- ・8月の巡回調査では、平均被害葉率は0.9%（平年被害葉率1.7%）で、平年より少なかった。
- ・西部地域のナシ園におけるフェロモントラップ調査では、8月第1～4半旬の合計誘殺数はチャハマキが7.6頭（平年11.2頭）、チャノコカクモンハマキは10.7頭（平年13.9頭）で平年より少なく推移した。
- ・1か月予報によると、気温は高く、降水量は平年より多いと予想され、本種の発生をやや助長する。

#### 防除対策

- ・地域の予察灯やフェロモントラップの調査を参考にし、適期防除（成虫発生盛期の10～14日後）に努める。（誘殺データは防除所ホームページを参照）。

### ＜その他の病害虫＞

### ●フジコナカイガラムシ

- ・8月中旬に行った巡回調査では、平均寄生果率は1.7%（平年2.1）で平年よりやや少なかった。
- ・本種は果実とへたの間の薬剤が届きにくい所に寄生しているので散布を丁寧に行う。

## 【果樹全般】

### ●カメムシ類（チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ）

#### 予報の根拠

- ・8月第1～4半旬までのフェロモントラップでは、チャバネアオカメムシの平均合計誘殺数（東部を除く）は72.9頭/箇所（平年211.1頭/箇所）と平年よりも少なかった。
- ・8月中下旬のスギ、ヒノキにおけるカメムシ類の平均寄生数は1.1頭/10結果枝（平年1.9頭）と平年より少なかった。

#### 防除対策

- ・フェロモントラップ及び予察灯による誘殺数は、防除所ホームページを参照する。
- ・スギ・ヒノキ林付近の果樹園では多発しやすいため、ほ場の発生状況をよく観察し、発生が見られれば防除を行う。

## 【ネギ】

### ＜生育の概況等＞

生育は平年並～早く、順調に進んでいる。

### ●疫病

#### 予報の根拠

- ・8月下旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年平均発病株率3.1%）。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、本病の発生を助長する（病原菌生育適温28～30℃）。

### 防除対策

- ・多湿な環境で発生が多いため、例年発生が認められるほ場では、溝を切るなどしてほ場排水を良くする。
- ・窒素肥料の多用は本病を助長するため、施用量に気をつける。

### ●黒斑病・葉枯病

#### 予報の根拠

- ・8月下旬の巡回調査では、上位3葉における平均発病株率が0.6%(平年発病株率3.8%)と、平年に比べ少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、本病の発生を助長する。

### 防除対策

- ・肥料切れや草勢の衰えは発病を助長するので、適切に施肥を行う。
- ・風ずれやネギアザミウマの食害は本病の発生を助長するため防風ネットの設置や本虫の防除につとめる。
- ・薬剤による防除は予防散布や発生初期の散布効果が高いため、初期防除につとめる。

### ●シロイチモジヨトウ

#### 予報の根拠

- ・8月下旬の巡回調査では、平均寄生株率は0.2%(平年寄生株率2.0%)で平年に比べ発生が少なかった。
- ・1か月予報では、9月は気温が高いが、降水量は多いことから、発生を特に助長しない。
- ・例年9月に発生が増加することから、ほ場をよく観察し、薬剤感受性が高い若齢幼虫のうちに防除する。
- ・すでに発生が増加しているほ場では、早めに薬剤散布を行う。

### ●ネギハモグリバエ

#### 予報の根拠

- ・8月下旬の巡回調査では、平均寄生株率は51.6%(平年30.3%)で平年に比べ発生が多かった。
- ・1か月予報では、9月は気温が高いが、降水量は多いことから、発生を特に助長しない。

### 防除対策

- ・生育初期に本虫が多発すると生育が遅れるため、本種の発生に注意し早期に防除を行う。

### ●ネギアザミウマ

#### 予報の根拠

- ・8月下旬の巡回調査では、平均寄生株率は63.6%(平年33.4%)で平年に比べ発生が多かった。
- ・1か月予報では、9月は気温が高いが、降水量は多いことから、発生を特に助長しない。

### 防除対策

- ・多発すると生育が遅れるため、発生が増加する前に防除を行う。すでに、発生が増加しているほ場では早めに防除を行う。
- ・本種はネギえそ条斑病の原因となるアイリスイエロースポットウイルス(IYSV)を伝搬する。罹病株はタマネギやエシャレット等、他のネギ類にも感染・発病するため、見つけ次第ほ場の外に持ち出し、土中に埋める等の処分をする。

## 【イチゴ】

### <生育の概況等>

苗の生育は平年並である。

### ●炭疽病

#### 予報の根拠

- ・ 8月の育苗ほの巡回調査では、ほ場での発生はみられなかったもの（平年値なし）、発病株をハウス外に放置しているほ場がいくつかみられた。また、病虫害防除員からの報告によると発生は平年並～やや少ないとのことであった。
- ・ 1か月予報では、9月の気温は平年より高く、降水量は多いため、本病の発生を助長する。

#### 防除対策

- ・ 発病株は見つけ次第、培地（培土）も含めて抜き取りビニル袋に入れ処分し、定植苗には使用しない。
- ・ 薬剤散布は予防散布を中心に努める。

### ●うどんこ病

#### 予報の根拠

- ・ 8月の育苗ほの巡回調査では平均発病株率は1.8%であった（平年値なし）。また、病虫害防除員等からの情報では発生は平年並とのことであった。
- ・ 1か月予報では、9月の気温は平年より高く、降水量は多いため、本病の発生を特に助長しない。

#### 防除対策

- ・ 高温期の発病は少ないが、特に6、7月に発生がみられたほ場では、育苗期から予防的に薬剤散布を行い無病苗の定植に努める。

### ●ハダニ類

#### 予報の根拠

- ・ 8月の育苗ほの巡回調査では、平均寄生株率7.4%であった。また、中部地域の石垣栽培では平均寄生株率は15.0%と県平均より多かった。
- ・ 1か月予報では、9月の気温は平年より高く、本種の発生を助長する。

#### 防除対策

- ・ 近年、本ほでの多発が続いていることから、育苗期の防除を徹底し、本ほへ持ち込まないように注意する。

### ●ハスモンヨトウ

#### 予報の根拠

- ・ 8月の育苗ほの巡回調査では、寄生はみられなかったが、平均被害株率3.8%であった。また、病虫害防除員等からの情報では、寄生は平年並～やや少であった。
- ・ フェロモントラップの調査によると、8月中旬までの誘殺数は、県中部で平年並、県西部では平年並～多であった。
- ・ 1か月予報では、9月の気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、本種の発生をやや助長する。

### 防除対策

- ・初期発生に注意し、若齢のうちに防除を行う。施設の開口部に防虫網を設置し侵入を防ぐ。

### <その他の病虫害>

#### ●コガネムシ類

- ・県西部の予察用におけるコガネムシ類の誘殺状況は、ドウガネブイブイが平年よりやや少なく、アオドウガネが平年より多かった。
- ・発生がみられるほ場では、定植前に薬剤を本ほに土壌混和する。定植時には根への幼虫の寄生に注意し、本ほへ幼虫を持ち込まないように注意する。

### 【トマト】

### <その他の病虫害>

#### ●黄化葉巻病（タバココナジラミ）

- ・1か月予報によると、9月の気温は平年より高いため、ハウス内でのコナジラミ類の増加、黄化葉巻病の発生が懸念される。本病は生育初期に感染すると特に被害が著しいため、育苗期間中に感染が疑わしい株が見られたら、定植せず取り除き、育苗期から体系的にコナジラミ類の防除を行うことが重要である。

### 【キク（露地）】

### <生育の概況等>

生育は平年並である。

#### ●白さび病

##### 予報の根拠

- ・8月下旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発病株率0.1%）。
- ・1か月予報では、9月の降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本病の発生を特には助長しない（本病の発病適温17℃前後）。

##### 防除対策

- ・9月の高温は本病の病原菌の生育に適さないが、初期防除を怠ると生育に好適な条件となる秋以降の防除が困難となるので、発生ほ場では初期防除に努める。
- ・発生ほ場、特に罹病性品種を中心に薬剤散布を行う。ただし、薬剤によっては薬害が出やすいので、新しい品種では小規模の試し散布を行う。
- ・発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、土中に埋めるかビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。

#### ●黒斑病、褐斑病

##### 予報の根拠

- ・8月下旬の巡回調査では、平均発病株率1.4%（平年3.5%）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、9月の気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、本病の発生を助長する（本病は特に降雨が続くと発生が多くなる。病原菌の生育適温は黒斑病24～28℃、褐斑病20～28℃）。

### 防除対策

- ・本病は潜伏期間が長く、発病後の防除では手遅れとなるので、例年発生が見られるほ場では薬剤の予防散布を行う。
- ・発病葉は感染源となるため速かに摘み取り、土中に埋めるかビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。また、土の上に落ちた被害葉は、伝染源となるため、ほ場に放置しない。

### ●えそ病（トマト黄化えそウイルス：TSWV）

#### 予報の根拠

- ・8月下旬の巡回調査では、本病の発生は確認されなかったが（平年0.2%）、媒介虫であるアザミウマ類による被害株率は20.3%（平年6.5%）と平年より多かった。
- ・1か月予報では、9月の気温は平年より高いが、降水量は平年より多いため、媒介虫であるアザミウマ類の増殖を特には助長しない。

#### 防除対策

- ・発病株は伝染源となるため速やかに抜き取り、土中に埋めるかビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。
- ・ミカンキイロアザミウマやネギアザミウマなどのアザミウマ類は本ウイルスを媒介するため、食害が認められる場合には速やかに薬剤散布を実施する。

### ●アザミウマ類（ミカンキイロアザミウマ、クロゲハナアザミウマ）

#### 予報の根拠

- ・8月下旬の巡回調査では、平均被害株率は20.3%（平年6.5%）と平年より多かった。
- ・1か月予報では、9月の気温は平年より高いが、降水量は平年より多いため、アザミウマ類の増殖を特には助長しない。

#### 防除対策

- ・えそ病が認められた場合は被害株を速やかに抜き取り処分するとともに、アザミウマ類の薬剤防除を徹底する。
- ・開花期のキクは特にミカンキイロアザミウマの被害を受けやすいため、開花初期から発生に注意する。
- ・中～下位の葉裏を観察し、寄生が確認された場合は直ちに薬剤防除を行う。

### ●ハダニ類（ナミハダニ）

#### 予報の根拠

- ・8月下旬の巡回調査では、雌成虫の寄生は確認されなかった（平年0.4頭/10葉）。
- ・1か月予報では、9月の気温は平年より高いが、降水量は平年より多いため、ハダニ類の増殖を特には助長しない。

#### 防除対策

- ・中～下位の葉裏を観察し、寄生が確認された場合は直ちに薬剤防除を行う。ただし、薬剤抵抗性を回避するため、同一系統の薬剤を連用しない。

### ●アブラムシ類

#### 予報の根拠

- ・8月下旬の巡回調査では、寄生は確認されなかった（平年1.1%）。

## 病虫害発生予察情報

- ・ 1か月予報では、9月の気温は平年より高いが、降水量は平年より多いため、アブラムシ類の増殖を特には助長しない。

### 防除対策

- ・ 芽における発生に注意し、初期防除に努める。

## ●オオタバコガ

### 予報の根拠

- ・ 8月下旬の巡回調査では、平均被害株率は2.3%（平年8.7%）と平年より少なかった。
- ・ 浜松市のキク産地におけるフェロモントラップの誘殺数は平年並～少なく推移している。
- ・ 1か月予報では、9月の降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、オオタバコガの増殖を助長する。

### 防除対策

- ・ 芽における被害の発生に注意し、初期防除に努める。

## 3 季節予報

### (1) 1か月予報（東海地方 平成28年8月25日 名古屋地方气象台発表）

【予報期間】 8月27日から9月26日

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。天気は数日の周期で変わるでしょう。向こう1か月の平均気温は、高い確率60%です。降水量は、多い確率60%です。週別の気温は、1週目は、平年並または高い確率ともに40%です。2週目は、高い確率70%です。3～4週目は、高い確率50%です。

【確率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1か月	気温	10	30	60
1か月	降水量	10	30	60
1か月	日照時間	30	40	30
1週目	気温	20	40	40
2週目	気温	10	20	70
3～4週目	気温	10	40	50

【予報の対象期間】

- 1か月 : 8月27日（土）～ 9月26日（月）
- 1週目 : 8月27日（土）～ 9月2日（金）
- 2週目 : 9月3日（土）～ 9月9日（金）
- 3～4週目 : 9月10日（土）～ 9月23日（金）



(2) 3か月予報（東海地方 平成 28 年 8 月 24 日 名古屋地方气象台発表）

【予報期間】 9月から11月

【予想される向こう3か月の天候】

向こう3か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。この期間の平均気温は、高い確率50%です。

9月 天気は数日の周期で変わるとでしょう。気温は、高い確率60%です。

10月 天気は数日の周期で変わるとでしょう。気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

11月 平年と同様に晴れの日が多いとでしょう。気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

【気 温】

3か月			9月			10月			11月		
低	並	高	低	並	高	低	並	高	低	並	高
10	40	50	10	30	60	20	40	40	20	40	40

【降水量】

3か月			9月			10月			11月		
少	並	多	少	並	多	少	並	多	少	並	多
30	40	30	30	30	40	30	40	30	40	30	30

※ 参考資料

	平均気温 (°C)			降水量 (mm)		
	9月	10月	11月	9月	10月	11月
浜松	24.1	18.8	13.5	249	165	119
静岡	24.1	18.9	13.9	292	200	132
三島	23.6	18.0	12.8	243	184	107

\*降水量は小数点以下を四捨五入しています。

※参考資料

利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い(少ない)」「平年並」「高い(多い)」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1981~2010年の30年間における各階級の出現率が等分(それぞれ33%)となるように決めてあります。(気候的出現率と呼びます)。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い(少ない)場合は「平年に比べて多い(少ない)」、また平年の日数と同程度に多い(少ない)場合には「平年と同様に多い(少ない)」と表現します。なお、単に多い(少ない)と表現した場合には対象期間の2分の1よりも多い(少ない)ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病害虫防除所 〒438-0803 磐田市富丘678-1 TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780 URL <a href="http://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html">http://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html</a>
--

平成 28 年度 技術情報第 5 号  
ネギ ネギアザミウマ・ネギハモグリバエ

平成 28 年 8 月 31 日  
静岡県病虫害防除所長

県西部地域のネギ生産ほ場でネギアザミウマとネギハモグリバエが多発しています。被害の拡大が予想されるため、防除の徹底をお願いします。

## 1 発生状況

8 月中下旬の巡回調査では、ネギアザミウマの平均寄生株率は 63.6% (平年 33.4%)、同発生面積率は 100% (平年 80%)、ネギハモグリバエの平均寄生株率は 51.6% (平年 30.3%)、同発生面積率は 100% (平年 89%) で両種ともに平年より高かった (表 1)。

県内産地の防除員から多発の報告がある。

## 2 防除方法

- (1) 発生を確認したら防除を実施する。防除薬剤については表 2、表 3 を参考にするとともに、農薬の使用に当っては必ずラベルを確認し使用基準を遵守する。
- (2) 液剤散布では展着剤を加用し、薬液が根元から葉先まで十分に付着するように、丁寧に散布する。
- (3) 薬剤等の詳細については静岡県農薬安全使用指針・農作物病虫害防除基準 (<http://www.s-boujo.jp>) を確認する。また、不明な点は病虫害防除所、農林事務所、農協等指導機関等に問い合わせる。



図 1 ネギアザミウマ (成虫)



図 2 ネギハモグリバエ (成虫)

表 1 8 月のネギアザミウマとネギハモグリバエの発生状況

害虫名		寄生株率(%)	発生面積率(%)
ネギアザミウマ	本年平均値	63.6	100
	平年値	33.4	80
ネギハモグリバエ	本年平均値	51.6	100
	平年値	30.3	89

調査時期:平成 28 年 8 月 24 日

県西部(浜松・磐田)地域 10 か所調査 平年値は過去 10 年間の平均値

表2 ネギアザミウマの主な防除薬剤(作物:ねぎ)

適用害虫名	商品名	使用方法	希釈倍数・使用量	時期	回数	IRAC 作用機分類*	系統名
アザミウマ類	アドマイヤー1粒剤	植溝土壌混和	4kg/10a	定植時	1回	4A	ネオニコチノイド系殺虫剤
アザミウマ類	アドマイヤーフロアブル	散布	2000~4000倍	収穫14日前まで	2回以内	4A	ネオニコチノイド系殺虫剤
アザミウマ類	アドマイヤーフロアブル	灌注	200倍	定植前日~定植時	1回	4A	ネオニコチノイド系殺虫剤
アザミウマ類	アルバリン粒剤	株元散布	6kg/10a	生育期(但し、収穫3日前まで)	2回以内	4A	ネオニコチノイド系殺虫剤
アザミウマ類	アルバリン粒剤	株元散布	6kg/10a	定植時	1回	4A	ネオニコチノイド系殺虫剤
アザミウマ類	アルバリン粒剤	播溝土壌混和	6kg/10a	は種時	1回	4A	ネオニコチノイド系殺虫剤
アザミウマ類	アルバリン顆粒水溶剤	株元灌注	400倍	生育期(但し、収穫14日前まで)	1回	4A	ネオニコチノイド系殺虫剤
アザミウマ類	アルバリン顆粒水溶剤	灌注	50倍	定植前日~定植時	1回	4A	ネオニコチノイド系殺虫剤
アザミウマ類	スタークル粒剤	株元散布	6kg/10a	生育期(但し、収穫3日前まで)	2回以内	4A	ネオニコチノイド系殺虫剤
アザミウマ類	スタークル粒剤	株元散布	6kg/10a	定植時	1回	4A	ネオニコチノイド系殺虫剤
アザミウマ類	スタークル粒剤	播溝土壌混和	6kg/10a	は種時	1回	4A	ネオニコチノイド系殺虫剤
アザミウマ類	スタークル顆粒水溶剤	株元灌注	400倍	生育期(但し、収穫14日前まで)	1回	4A	ネオニコチノイド系殺虫剤
アザミウマ類	スタークル顆粒水溶剤	灌注	50倍	定植前日~定植時	1回	4A	ネオニコチノイド系殺虫剤
アザミウマ類	スピノエース顆粒水和剤	散布	2500~5000倍	収穫3日前まで	3回以内	5	スピノシン系殺虫剤
アザミウマ類	ディアナSC	散布	2500~5000倍	収穫前日まで	2回以内	5	スピノシン系殺虫剤
アザミウマ類	ハチハチ乳剤	散布	1000倍	収穫3日前まで	2回以内	21A	その他の合成殺虫剤
アザミウマ類	モスピラン顆粒水溶剤	散布	2000倍	収穫7日前まで	3回以内	4A	ネオニコチノイド系殺虫剤
ネギアザミウマ	アクタラ粒剤5	作条混和	6~9kg/10a	植付時	1回	4A	ネオニコチノイド系殺虫剤
ネギアザミウマ	アクタラ粒剤5	作条混和	6kg/10a	は種時	1回	4A	ネオニコチノイド系殺虫剤
ネギアザミウマ	アクタラ顆粒水溶剤	散布	1000~2000倍	収穫3日前まで	3回以内	4A	ネオニコチノイド系殺虫剤
ネギアザミウマ	ウララDF	散布	1000~2000倍	収穫前日まで	3回以内	29	その他の合成殺虫剤
ネギアザミウマ	コルト顆粒水和剤	散布	2000倍	収穫3日前まで	3回以内	9B	その他の合成殺虫剤
ネギアザミウマ	ダントツ水溶剤	散布	2000~4000倍	収穫3日前まで	4回以内	4A	ネオニコチノイド系殺虫剤
ネギアザミウマ	ダントツ粒剤	株元散布	3~6kg/10a	収穫3日前まで	4回以内	4A	ネオニコチノイド系殺虫剤
ネギアザミウマ	プレオフロアブル	散布	1000倍	収穫3日前まで	4回以内	un	その他の合成殺虫剤
ネギアザミウマ	ベストガード粒剤	植溝処理土壌混和	6kg/10a	定植時	1回	4A	ネオニコチノイド系殺虫剤
ネギアザミウマ	ランネット45DF	散布	1000~2000倍	収穫7日前まで	4回以内	1A	カーバメート系殺虫剤
ネギアザミウマ	リーフガード顆粒水和剤	散布	1500倍	収穫7日前まで	2回以内	14	ネライストキシン系殺虫剤

\* 世界農薬工業連盟 殺虫剤抵抗性対策委員会(IRAC)による分類。農薬抵抗性の発達を回避するため、同一コードの薬剤は連用を避ける。

表3 ネギハモグリバエの主な防除薬剤（作物:ねぎ）

適用害虫名	商品名	使用方法	希釈倍数・使用量	時期	回数	IRAC 作用機分類*	系統名
ハモグリバエ類	アルバリン粒剤	株元散布	6~9kg/10a	生育期（但し、収穫3日前まで）	2回以内	4A	ネオニコチノイド系殺虫剤
ハモグリバエ類	アルバリン粒剤	株元散布	6kg/10a	定植時	1回	4A	ネオニコチノイド系殺虫剤
ハモグリバエ類	アルバリン粒剤	播溝土壌混和	6kg/10a	は種時	1回	4A	ネオニコチノイド系殺虫剤
ハモグリバエ類	アルバリン顆粒水溶剤	株元灌注	400倍	生育期（但し、収穫14日前まで）	1回	4A	ネオニコチノイド系殺虫剤
ハモグリバエ類	アルバリン顆粒水溶剤	灌注	50倍	定植前日~定植時	1回	4A	ネオニコチノイド系殺虫剤
ハモグリバエ類	スタークル粒剤	株元散布	6~9kg/10a	生育期（但し、収穫3日前まで）	2回以内	4A	ネオニコチノイド系殺虫剤
ハモグリバエ類	スタークル粒剤	株元散布	6kg/10a	定植時	1回	4A	ネオニコチノイド系殺虫剤
ハモグリバエ類	スタークル粒剤	播溝土壌混和	6kg/10a	は種時	1回	4A	ネオニコチノイド系殺虫剤
ハモグリバエ類	スタークル顆粒水溶剤	株元灌注	400倍	生育期（但し、収穫14日前まで）	1回	4A	ネオニコチノイド系殺虫剤
ハモグリバエ類	スタークル顆粒水溶剤	灌注	50倍	定植前日~定植時	1回	4A	ネオニコチノイド系殺虫剤
ネギハモグリバエ	カスケード乳剤	散布	4000倍	収穫14日前まで	3回以内	15	昆虫成長制御剤
ネギハモグリバエ	ダイアジノン乳剤40	散布	1000~2000倍	収穫21日前まで	2回以内	1B	有機リン系殺虫剤
ネギハモグリバエ	ダントツ水溶剤	散布	2000~4000倍	収穫3日前まで	4回以内	4A	ネオニコチノイド系殺虫剤
ネギハモグリバエ	ダントツ粒剤	株元散布	3~6kg/10a	収穫3日前まで	4回以内	4A	ネオニコチノイド系殺虫剤
ネギハモグリバエ	ディアナSC	散布	2500~5000倍	収穫前日まで	2回以内	5	スピロシン系殺虫剤
ネギハモグリバエ	ベストガード粒剤	植溝処理土壌混和	6kg/10a	定植時	1回	4A	ネオニコチノイド系殺虫剤
ネギハモグリバエ	ベリマークSC	灌注	400倍	育苗期後半~定植当日	1回	28	ジアミド系殺虫剤
ネギハモグリバエ	リーフガード顆粒水和剤	散布	1500倍	収穫7日前まで	2回以内	14	ネライストキシン系殺虫剤

\* 世界農薬工業連盟 殺虫剤抵抗性対策委員会 (IRAC) による分類。農薬抵抗性の発達を回避するため、同一コードの薬剤は連用を避ける。

問い合わせ先：静岡県病害虫防除所（TEL：0538-36-1543）

病害虫防除所 HP（URL）：

<http://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html>

病害虫防除基準 HP（URL）：<http://www.s-boujo.jp/>